

はじめに

華嚴経は3世紀ごろに中央アジアで成立し、六十卷華嚴経と八十卷華嚴経の原典は何れもウテン国、現在の中国新疆ウイグル自治区ホータンに栄えたオアシス国家からもたらされました。六十卷華嚴は420年に仏陀跋陀羅によって、八十卷華嚴は7世紀末頃に実叉難陀によって漢訳されています。中国ではこの経典をもとに華嚴宗が興り、第三祖の法蔵(643年～712年)によって六十華嚴の注釈書である『探玄記』が著され、深遠な華嚴教義が展開していきました。日本の華嚴宗もこの流れをくむものです。このように、華嚴教義は華嚴経が中国に伝来して後、華嚴宗のなかで作り上げられていったものであります。

一方、中央アジアやウテン国といった地域との関わりの中、華嚴経がどのような思想的背景の中で成立したのかという点については、あまり問題とされることはなかったようにも思われます。それは、大乘経典も釈尊が直々に説かれた教えであるという伝統的理解においては、その成立背景などを考えること自体がはばかられたのかもかもしれません。

しかし、百年前に各国によって行われたシルクロード調査ではウテン国についての知見ももたらされました。筆者はそれらの資料研究と関連させながら、西域南道のウテン国周辺や中央アジアの遺跡を調査してきました。それらの調査研究の中から、仏教文化学的視点からの考察がいよいよ重要なものとなるという確信を得ました。

華嚴教義の研究者からはお叱りを頂くかもしれませんが、中国仏教の精華である華嚴教学の体系を通さずに経典を読み、その特徴がどのように成立したのかを考えることも無意味なことではないように思われます。

ウテン国の仏教

ウテン国が位置する西域南道は、3世紀から5世紀ころにかけての古い時代の遺跡が残されている点に特徴があります。それは西域北道と比べて、交易によって繁栄した期間が比較的短いことに起因しています。例えば、ウテン国の東側周辺ではすでに6世紀以後には衰退し、廃虚となっていたことが玄奘三蔵『大唐西域記』にも記されています。その第十二巻にはウテン国の旧称、瞿薩旦那(クスタナ)国について次のように記しています。

「瞿薩旦那国は周囲四百余里ある。砂や石ころが大半で、土壤の所は狭隘である。穀作に適し、いろいろな果実が多い。・・・中略・・・文字・法則はインドのあり方に従っているが、少し字体・筆勢を改め、やや変化がある。言語は諸国に異なっている。篤く仏法を尊んでおり、伽藍は百余カ所、僧徒は五千余人、みな大乘の教えを学習している。王は甚だ勇敢で、篤く仏法を信じ、自ら毘沙門天の後裔であると言っている。

その昔、この国は広々と住む人もなく、毘沙門天だけがここに住んでいた。無憂(アショーカ)王の太子がタキシラ国で目を抉りとられた時、無憂王は怒ってその輔佐の大臣を罰し、その豪族たちを流して、ヒマラヤの北方に追放し、荒れた谷間に置いた。流人たち

は獣を追い求めつつこの西の境界までやってきて、主だったものを推挙して王とした。」

瞿薩旦那国の言語であるウテン語（コータン・サカ語）は20世紀初頭の西域探検で再発見された言語のひとつです。『大唐西域記』に「文字・法則はインドのあり方に従っているが、少し字体・筆勢を改め、やや変化がある。言語は諸国に異なっている」と記されているように、インドのアップライト（直立）グプタ文字を用いてイラン系の言語を表記していたことが分かっています。この言語で書かれた文献をコータン（ホータン）本と呼んでいます。

このコータン本には阿育（アショーカ）王伝の2写本が残されています。阿育王伝は先に挙げた『大唐西域記』の記述と同じ事件を扱ったものです。この写本についてはすでに研究者の間で問題点が指摘されていました。

「建国の由来を仏法の大保護者たる阿育王に結び付けて置きながら、而も此の伝説の中、直接にも間接にも仏教に関連した点の絶無なのは如何なる故であろうか。若しも此伝説が全部仏教の空气中に於いて構成されたものであったならば、必然于闐の仏教と仏教の大宣布者たる阿育王との間に何等かの関連を附すべき筈である。然るに、事実上両伝ともに毫しも斯かる傾向の絶えてなきのみならず、却って両伝ともに仏教の渡来の時期を其の後に置いて居るのである。斯く此の伝説の上に些しも仏教徒の野心の痕跡が現われていない所から観ると、此の中には仏教渡来以前より此の国に存在していた真の伝説を幾分漏らして居るのではなかろうか。」
羽溪了諦『西域之仏教』

ここに指摘されている疑問はコータン本阿育王伝が反阿育王側の観点で書かれているところに起因します。一般に、阿育王伝中のクナーラ王子物語は側室のティシャラクシター女王と夜叉大臣が共謀してクナーラ王子を陥れ、任地タキシラに赴いた王子に偽りの命令書を送って両目を抉らせるという展開になっています。しかし、コータン本の写本では、反阿育王の立場に立って、ティシャラクシター女王や夜叉大臣側を弁護する内容となっているのです。例えば、事件の発端である夜叉大臣が阿育王の怒りをかったのは、大王が比丘たちの足下に頂礼するのをたしなめたことにあり、その理由として王の権威を保つべきであることを挙げています。

建国伝説に紀元前3世紀の阿育王との関連を述べながら、仏教の伝来には触れない点にウテン国の先祖の悲劇が隠されていると言えます。そのようなウテン国の人々が保持していたのが毘沙門天への信仰でした。毘沙門天による護国伝説は『大唐西域記』縛喝（バルフ）国にも記されています。それは仏教よりも前に存在していた中央アジアの習俗であり、紀元後1世紀から3世紀にかけてインドを支配したクシャーン朝の宗教と同じものであったと考えられます。華嚴経の成立背景にはクシャーン朝の国教であったゾロアスター教の存在があったのです。

ゾロアスター教の啓蒙書『アルダー・ウィラーズ・ナーメ』

『アルダー・ウィラーズ・ナーメ（敬虔なるウィラーズの手紙）』は主人公アルダー・ウィ

ラーズが冥界におもむき、天国と地獄さらには中間界を遍歴した後、蘇生して見聞きしたことを書き記したものと伝えられています。アルダー・ウィラーズはゾロアスター教の拝火僧ウェフ・シャープールがモデルだとされています。彼は6世紀ころのサーサーン朝ペルシアのホスロー1世（在位 531年から579年）の頃の人であります。ただしそこで述べられる冥界の考え方は、ゾロアスター教の聖典『アヴェスター』にまで遡ることができるものであって、中央アジアからホータン地域にまで広く流布していたものと推定できます。

例えば、スタインが敦煌で発見した『還魂記』には、開元寺の道明という僧が閻魔王のもとに連れて行かれ、裁きを受けることになりましたが、龍興寺の道明との人違いであったことが判明し、再び現世に戻されたことが述べられています。その際、道明は獅子をしたがえた頭巾を被った禅僧を目の当たりにしました。この禅僧が地蔵菩薩であり、現世に戻った道明はその光景を絵にしたといえます。『仏祖統紀』第三十三王供の条（大正新脩大蔵経第49巻・大正番号2035・p.322a29）にも、

「世に伝う。唐道明和上は神、地府に遊びて十王の亡人を分治するを見、因りて名を世間に伝う。人終に多く此の供を設く」とあります。

この逸話は『アルダー・ウィラーズ・ナーメ』からの翻案である可能性も考えられます。「アルダー」は中世ペルシア語で「正しい、真実の」の意味であり「明」に対応させることができます。また、「ウィラーズ」に類似する語で「ウィダラグ」は「道」という意味になります。中世ペルシア語を表記したパフラヴィー文字は、一つの文字で複数の音価を持つため、曖昧さを伴う文字として知られています。したがって、若干の転訛を許容すれば、意味の上で「道明」と一致することには注目すべきでありましょう。

先に述べたように、『アルダー・ウィラーズ・ナーメ』の成立年代は、華嚴経ができた時期よりかなり後になります。しかし、その内容自体はゾロアスター教の古い伝統をふまえています。例えば、死者の良心が女神の姿となって先回りし、冥界で出会うということや、ミフル（ミトラ）が善悪何れの人間に対しても等しく契約として働くという記述など、その中心となる部分は『アヴェスター』にもとづいています。したがって、その内容自体は紀元前後頃に遡ることが可能であり、長い口承口伝の時代を経たのちに、ホスロー1世の頃のマジ僧がその主人公として仮託されたものと考えられます。

アケメネス朝ペルシアがアレキサンドロスによって侵略され、ゾロアスター教が混乱した時代をへた後、アルダー・ウィラーズはその敬虔さの故に、真の教えを回復する為に、冥界旅行を遂行するよう選ばれます。彼は酒と麻薬を飲んで昏睡状態に陥ったのち、彼の魂は冥界に旅立ちます。最初に彼の信仰心と敬虔さの権化である美しいディーン女神に出会います。さらに、死後に渡らねばならないチヌヴァト橋を渡った後、彼は精霊スローシュとアダールに導かれ、天界へと上昇します。

有徳ではあったもののゾロアスター教を信仰しなかった者に割りあてられた「星の駅」「月の駅」及び「太陽の駅」という世界を通過し、天界においてオフルマズド（アフラ・マズダーの中世語形）と出会います。天界の人々は生前の生き方の理想化された姿、すな

わち、男女とも、戦士、農夫、羊飼、また他の職業に従事するものとして描かれます。

その後、精霊スローシュとアダールはウィラーズを地獄の世界へと案内します。冥界旅行の終わりに際して、オフルマズドはゾロアスター教の信仰についてウィラーズに教を授けます。そして、七日間の冥界旅行を終えて、ウィラーズは生き返り、冥界で見聞したことを書記に記録させます。

以上がその概要です。冥界へ赴いて精霊から啓示を得るという点で、ウィラーズは神の啓示を伝える預言者です。また、アレキサンドロスの侵略によって失われた宗教的秩序や教を回復するという目的で授かる啓示であるならば、その内容にはゾロアスター教の要点が示されているとも言えます。天国に生まれるべき行為、地獄に墮ちるべき行為、それらが平易な形で述べられているのです。

以下、華嚴経の教えと『アルダー・ウィラーズ・ナーメ』の内容とを対照させながら、ながめてみたいと思いますが、その前に六十巻華嚴経によってその概要を挙げてみます。

華嚴経の概要（六十華嚴による）（大正新脩大蔵経第九巻・大正番号 278・pp. 395-788）

華嚴経は七処八会の法座において説かれた教えとして構成されています。（ ）内に示したのは説法の会座で、①②は地上、③から⑥までは天界へと上昇しながらの説法、⑦⑧は再び地上にもどっての説法です。②⑦が普光法堂という同じ場所での法座ですから、七つの処における八度の会座ということになります。



第一、世間浄眼品 (①寂滅道場)

このように私はお聞かせいただいた。ある時、釈迦牟尼仏はマガダ国の寂滅道場において、初めて覺りを成就された。その場所は厳浄なる金剛座であった。さまざまな宝華で飾られ、上には大海のような妙宝輪がはかり知れない光明で満たされていた。釈迦牟尼仏の威光は全宇宙へと放たれた。その光明に応えるように菩薩たちが参集し始めた。

第二、盧舎那仏品 (①寂滅道場)

釈迦牟尼仏は集まってきた菩薩たちの想いを知って、目や鼻や耳、また歯の間の一つ一つから光明を放った。様々な光明が放たれ、それを見た菩薩たちは口々に讃嘆の言葉を述べた。釈迦牟尼仏が放った光の中に蓮華蔵世界と盧舎那仏が照らしだされる。「彼の諸菩薩は此の光を見已りて。蓮華蔵莊嚴世界海を觀ることを得。仏の神力の故なり。光明中に於いて而して偈を説いて言く」、この後に偈文が続く。

第三、如来名号品 (②普光法堂)

参集した菩薩たちはみな、仏世界と仏徳仏を顕現するように懇願し、釈迦牟尼仏はそれに応じて宇宙のすべての仏国と仏徳を見せる。

第四、四諦品 (②普光法堂)

文殊菩薩が四諦の名称について、仏国の相違に従って多様な呼び方があることを説く。

第五、如来光明覺品 (②普光法堂)

釈迦牟尼仏は両足の相輪から百億の光明を放った。全宇宙のあらゆるものが照らしだされた。また、それぞれの世界で仏陀たちが働く姿も照らしだされた。その不思議な力を受けた文殊菩薩は偈によって讃えた。

第六、菩薩明難品 (②普光法堂)

文殊菩薩が菩薩の難事について菩薩たちと問答を繰り広げる。

第七、浄行品 (②普光法堂)

文殊菩薩が菩薩の浄行について菩薩たちと問答を繰り広げる。

第八、賢首菩薩品 (②普光法堂)

文殊菩薩が菩薩の浄行について賢首菩薩と問答を繰り広げる。

第九、仏昇須弥頂品 (③忉利天)

その時、釈迦牟尼仏が放った不思議な力を受けて、全宇宙の菩薩たちはさまざまに仏法を説いた。また、釈迦牟尼仏は不思議な力を發揮して、菩提樹の下から起つことなく、須弥山の山頂にある帝釈天の宮殿へと昇った。帝釈天は宮殿から遙か遠くに釈迦牟尼仏が昇ってくるのを見ると、宮殿を飾り立てて、迎えた。帝釈天は釈迦牟尼仏が忉利天に留まるように勧め、過去仏たちも皆それぞれ忉利天に來臨したことを偈によって讃える。

第十、菩薩雲集妙勝殿上説偈品 (③忉利天)

その時、はるか遠くの世界の菩薩たちが須弥山の山頂に集まってきた。しかも、不思議な力によって十方世界に万華鏡に映し出されるように無数の須弥山が現出し、そのそれぞれの世界にも同様に釈迦牟尼仏がいて、多くの菩薩たちが集まっている。その時、釈迦牟

尼仏は両足の指から光を放ち、全宇宙を照らした。法慧菩薩はその不思議に触発され、それを讃えて偈によって讃えた。しばらくは、法慧菩薩を中心に展開する。

第十一、菩薩十住品（③忉利天、十住位についての説法）

法慧菩薩が菩薩の十住位について説く。

第十二、梵行品（③忉利天）

法慧菩薩が正念天子の問いに答えて、菩薩の梵行について説く。

第十三、初発心菩薩功德品（③忉利天）

帝釈天は法慧菩薩に問うた。「初めて発心をおこした菩薩はどれほどの功德の蔵を完成することができるのか？」それについて、法慧菩薩は「それはとても難解な問題ではあるが、釈迦牟尼仏の不思議な力を受けてお話ししよう。・・・初めて発心をおこした菩薩はそのまが仏である。皆悉く三世の諸如来と同等なのである。・・・」と答える。

第十四、明法品（③忉利天）

精進慧菩薩が法慧菩薩に尋ねた。「初発心の菩薩がそのようなはかりしれない功德を完成し、自らを莊嚴するのであれば、他の衆生への働きはどのようなものですか？三宝を盛り立てて存続させる、その教法とはなんですか？私に説き明かして下さい。よろこんで拝聴したいと思います。」この問いに対して、法慧菩薩がそれに答える。

第十五、昇夜摩天宮自在品（④夜摩天）

釈迦牟尼仏の不思議な力によって、全宇宙の諸仏世界、またこの娑婆世界も、皆すべて菩提樹の下に在って、顕現しないものはなかった。菩薩たちはその力を受けてさまざまに仏法を説いた。さてその時、釈迦牟尼仏は不思議な力によって、菩提樹の下の金剛座と帝釈天の宮殿の何れからも離れることなく、夜摩天の宝莊嚴殿へと向かわれた。夜摩天王は遙かに釈迦牟尼仏が昇り来るのを見て、それを迎えるために宮殿内を飾り立てた。全ての十方の夜摩天宮もまたそのようであった。その時、夜摩天王は妙なる音楽に浸りながら、過去に迎えた仏たちの勝れた行いを思い起こしつつ、それを偈によって讃えた。

第十六、夜摩天宮菩薩説偈品（④夜摩天）

釈迦牟尼仏は両足指から百千億の妙なる光明を放って、普ねく十方の一切世界を照らす。娑婆世界の菩提樹下や夜摩天宮の蓮華蔵宝師子座には全ての衆生が皆な悉く現われた。功德林菩薩は仏の不思議な力を受けて十方を観察し、偈によって感興を述べた。・・・その時、如来林菩薩も仏の不思議な力を受けて十方を観察し、偈によって感興を述べた。

「心は絵師のように種々の五陰を描く。一切世界中の法であって心が造りださないものはない。心のように仏もまたそうである。仏や衆生がそうであるのと同じである。心と仏と衆生との是の三つの差別はない。諸仏は皆一切のものが心から転じたものと了知する」

第十七、功德華聚菩薩十行品（④夜摩天、十行位についての説法）

功德林菩薩が十方世界から参集した菩薩たちと菩薩の十行位について述べる。

第十八、菩薩十無尽蔵品（④夜摩天）

功德林菩薩が十方世界から参集した菩薩たちと菩薩の十蔵について述べる。

第十九、如来昇兜率天宮一切宝殿品 (⑤兜率天)

釈迦牟尼仏は不思議な力によって、菩提樹下の座と須弥山頂の妙勝殿や夜摩天宮の宝莊嚴殿を離れることなく、さらに兜率天宮一切宝莊嚴殿へと昇る。兜率天王は遙かに仏が昇って来るのを見て、宮殿を莊嚴する。また、過去に迎えた仏たちの勝れた行いを思い起こしつつ、それを偈によって讃えた。

第二十、兜率天宮菩薩雲集讚仏品 (⑤兜率天)

十方世界から菩薩たちが兜率天宮へと参集し、釈迦牟尼仏の徳を讃嘆する。

第二十一、金剛幢菩薩十回向品 (⑤兜率天、十回向位についての説法)

金剛幢菩薩が十方世界から参集した菩薩たちと菩薩の十回向について述べる。

第二十二、十地品 (⑥他化自在天、十地位についての説法)

釈迦牟尼仏は他化自在天王宮の摩尼宝殿にあって、多くの菩薩たちが参集する。その中、金剛藏菩薩が菩薩の十地位について述べる。「三界虚妄但是一心作」はここで説かれる。

第二十三、十明品 (⑥他化自在天)

普賢菩薩が菩薩たちに対して菩薩の十明を説く。

第二十四、十忍品 (⑥他化自在天)

普賢菩薩が菩薩たちに対して菩薩の十種の忍を説く。

第二十五、心王菩薩問阿僧祇品 (⑥他化自在天、釈迦の説法)

心王菩薩は釈迦牟尼仏に問うた。「世尊よ。いわゆる、阿僧祇、不可量、無分齊、無周遍、不可数、不可称量、不可思議、不可説、不可説不可説などの数量はどのようなものでしょうか？」釈迦牟尼仏は心王菩薩に答える。「よろしい、よろしい。衆生を利益するために、この私によくぞ聞いた。仏の智慧の世界の深い意義を、よくぞ尋ねた。よく聞くのだぞ。私はまさにそれを説くであろう。」心王菩薩は仏に答えて「世尊よ。わかりました、善く聴きましょう。」釈迦牟尼仏は心王菩薩に言う。「百千の百千を一拘梨と名づく。拘梨の拘梨を一不変と名づく。不変の不変を一那由他と名づく。・・・不可説の不可説を不可説転と名づく。・・・」

第二十六、寿命品 (⑥他化自在天)

心王菩薩は菩薩たちに言う。「仏子よ。この娑婆世界の釈迦牟尼の仏国の一劫は安樂世界の阿弥陀の仏国においては一日一夜となる。また安樂世界の一劫は聖服幢世界金剛仏の仏国においては一日一夜となる。・・・」

第二十七、菩薩住处品 (⑥他化自在天)

心王菩薩が菩薩たちに十方世界の菩薩たちの住处について述べる。

第二十八、仏不思議法品 (⑥他化自在天)

参集した菩薩たちが、仏や菩薩について不可思議な想いを懐いているのを察した釈迦牟尼仏は、青蓮華菩薩に不可思議な力を与えて、不可思議について説かせる。

第二十九、如来相海品 (⑥他化自在天)

普賢菩薩が如来の徳相について説く。

第三十、仏小相光明功德品（釈迦の説法）

釈迦牟尼仏が宝手菩薩に対して諸世界の徳相を説く。

第三十一、普賢菩薩行品（⑥他化自在天）

普賢菩薩が菩薩たちに菩薩行について説く。

第三十二、宝王如来性起品（⑥他化自在天）

釈迦牟尼仏は眉間の白毫から大光明を放ち、光は宇宙を十周して如来性起妙徳菩薩の頭頂に入る。如来性起妙徳菩薩は釈迦牟尼仏の不可思議な力を承けて、偈頌を説き、それに応えて釈迦牟尼仏は口から光明を放ち、その光は普賢菩薩の口に入る。その奇瑞を見た如来性起妙徳菩薩は普賢菩薩に如来性起の教えを説くように勧め、普賢菩薩はその請いに応じて如来性起の法を説く。

第三十三、離世間品（⑦普光法堂）

釈迦牟尼仏はマガダ国の普光法堂において三昧の中にあり、普慧菩薩の問いに答えて普賢菩薩が離世間の法について説く。

第三十四、入法界品（⑧逝多園林、善財童子の遍歴）

以上の中で、華嚴経の教えを三点に要約することができるように思います。

第一に信満位成仏と呼ばれる教えです。切利天における説法で、第十三、初発心菩薩功德品で説かれます。「初めて発心をおこした菩薩はそのままが仏である。皆悉く三世の諸如来と同等なのである」と示されるものです。

第二には唯心説であります。夜摩天における説法で、第十六、夜摩天宮菩薩説偈品において示される教えです。「心は絵師のように種々の五陰を描く。一切世界中の法であって心が造りださないものはない。心のように仏もまたそうである。仏や衆生がそうであるのと同じである。心と仏と衆生との是の三つは差別がない。諸仏は皆一切のものが心から転じたものと了知する」（唯心偈）とあります。この唯心説は、他化自在天での説法、第二十二卷十地品の第六地でも「三界は虚妄にして但だ是れ一心の作すところなり」と説かれ、この法句もよく知られています。

第三には性起と縁起の相即であります。真理・真如の側面と生滅・現象の側面を示しながら、その両者が相即することを説くものです。

信満位成仏について

さて、第一の信満位成仏が可能となるのは、盧舎那仏が報身仏であると同時に法身仏であることによります。宇宙に遍満する法性の働きに包まれていることで、修行のどの過程にあってもその働きをこうむることができます。また、釈迦牟尼仏は菩提樹下の金剛座に坐しながら、切利天から夜摩天、兜率天、他化自在天へと上昇し、しかもどの会座から離れることがなかったと説かれます。これは、釈迦牟尼仏が盧舎那仏と融合する形で宇宙に遍満する様を述べたものです。釈迦牟尼仏の天界への上昇を述べるのに、六欲天中の四天を挙げたのは十住・十行・十回向・十地と対応させるためとも考えられますが、ゾロアス

ター教の善思天・善語天・善行天・無始光天との関わりも想定できるように思われます。『アルダー・ウィラーズ・ナーメ』の第十章には第四の無始光天に上昇したウィラーズを天界の精霊が迎えます。

ウィラーズや精霊スローシュたちの一行は、第四步目を全ての安らぎがあるガロードマン（無始光天）の光輝の中へとさらに進めます。そして、一行の方へ亡き者たちの霊魂が近づいて、ご機嫌伺いと称賛の言葉を述べます。「敬虔なるあなたはどのようにしてここへやって来たのですか。危険な世界から、また大変邪悪な世界を超えて、悲しみのない世界、危うさのないこの世界へ、あなたは来ているのです。また、不滅を享受するのです。なぜならここでは楽しみを永遠なる心の時間で見ることからです」と称賛します。

華嚴経では釈尊の説法はほとんどなく、十方から参集した菩薩たちが釈尊の威光を受けて讃嘆するという展開をとりますが、このウィラーズと亡き者たちの霊魂とのやりとりの中に似たような展開を見ることができます。

この四段階の天界は『アヴェスター』「ハーゾークト・ナスク第二章」にも述べられており、『アヴェスター』を翻訳された伊藤義教博士の解説文（伊藤義教訳『アヴェスター』p. 379、世界古典文学全集3、筑摩書房）には、中世に書かれた『アルダー・ウィラーズ・ナーメ』と同じ内容であることが指摘されています。したがって、ゾロアスター教の四つの天界は3世紀前後の中央アジアにおいてもよく知られていたものと考えられます。

唯心説について

ウィラーズが冥界に旅立ち、チヌヴァト橋（死者の善悪を審判する機能をもつ橋で、検校橋とも訳される）に差しかかると、自分の良心の投影であるディーン女神に出会います。敬虔なウィラーズの良心は健やかで美しい少女の姿で現れますが、生前に悪業を重ねた者の良心は疲弊し衰弱した老婆の姿で現れます。この自分の心の投影としてディーン女神が現れるという考えも、『アヴェスター』にまでさかのぼることができます。先に挙げた『アヴェスター』の「ハーゾークト・ナスク第二章」にも同じことが描かれています。美しい少女の姿のディーン女神か、醜い老婆の姿のディーン女神か、それはまさにその人の心が描き出したものにほかなりません。

また、精霊たちがウィラーズに告げる天国と地獄のちがいについても、興味深い内容が述べられています。

精霊スローシュとアダールはウィラーズの手を取り、このように言います。「おいでなさい、私たちは汝に天国と地獄を見せようと思います。敬虔さの報いである壮麗で光輝にあふれ安らかで豊かな楽しみや歓喜、そして芳しさが天国にはあります。また、私たちは汝に地獄の刑罰において、悪魔や魔術師や罪人たちが繰り広げる様々な種類の、暗黒や監禁や不名誉、不幸や悲しみ邪悪、苦痛や病や恐怖、また恐ろしさや有害さや悪臭を見せようと思います。私たちは汝に真実の場所と虚偽の場所を見せようと思います。私たちは汝に、オフルマズドや大天使たちへのゆるぎない信心の報いを、天国にある善なる者を、地

獄にある邪悪なる者を、そして神や大天使の存在を、そしてアフリマンや悪魔たちの非存在を、死者の救済と未来の身体が存在を見せようと思います」と。

ゾロアスター教では現実世界は現象の世界であり、天界は精神の世界であると説きます。この現実世界は真理に対して虚妄の世界となります。

性起と縁起の相即

宝王如来性起品では普賢菩薩が、「仏子よ。菩薩摩訶薩は、又復応に知るべし。如来性起の正法は、功德無量なり、行無量の故に。十方に充滿す、来去無きが故に。性は虚空の如し。悉く平等なるが故に。一切衆生は無我我所なり、尽くこと有ること無きが故に。一切刹に無尽なり、転ずること有ること無きが故に。未来際を断ぜず、退くこと有ること無きが故に。如来智は無礙なり、無二平等にして、有為無為を観察するが故に。等正覺を成じて衆生を饒益す、本と廻向を行じて自在満足せるが故なり」（大正新脩大蔵經第九卷・大正番号 278・p. 614b）と説きます。

「十方に充滿」し、「性は虚空の如し」とは、真理として遍滿する無為、縁起によって生起した有為の本質としての無為を指すものと考えられます。それが法性そのものであり、華嚴教義では理法界として展開することになります。縁起の側面である事法界との相即により、理事無礙法界、事事無礙法界という四種法界説として重要な教義へと結実します。

このような真理と現象の相即と類似する考え方がゾロアスター教にもありました。一般的にゾロアスター教は善悪二元論と理解され、世界は善神と邪神の相克の中に存在すると考えられています。しかし、オフルマズドとアフリマン（邪神であるアンラ・マイニユの中世語形）は善悪として対立する前に、同一の起源から起こったものと考えられていました。そこに、単純に二元論と言い切れない部分があることに注意しておかねばなりません。そして、この考え方はすでに『アヴェスター』の古層にあたるガーサー（梵語のガーター（伽陀）と同起源、「偈頌」）の中、善神と邪神が「双生児」であったと示されています。

『アヴェスター』ヤスナ第三十章第三節（伊藤義教訳『アヴェスター』、p. 330）に、

「では、睡眠を通して双生児としてあらわれた、かの始元の二霊についてであるが、両者は心意と言語と行為において、より正義なるものと邪悪なものであった」

とあります。サーサーン朝ペルシアの時代には善悪の二霊を生み出した統一原理として「永遠の時（ズルヴァーン）」が説かれるようになります。

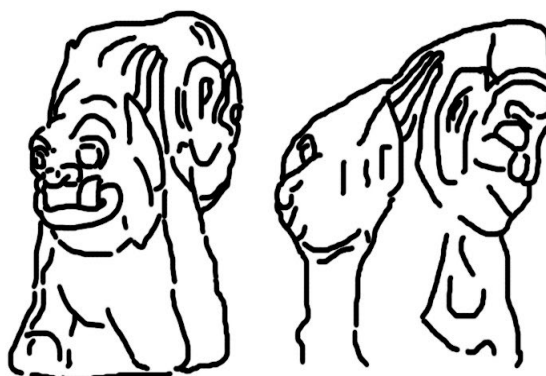
『アルダー・ウィラーズ・ナーメ』の第百章と第百一章にはアフリマンとオフルマズドの特徴が対照的に描かれています。第百章では世界の破壊者であるアフリマンが地獄の亡者に対して絶えず嘲笑し怒鳴りつけ、「何故に、オフルマズドのパンを絶えず喰らいながら、アフリマンの行為をなすのか。また、自分の創造主を思うことなく、アフリマンの欲望を行なうのか」と告げます。ここでは、アフリマンの言葉を借りて、全ての者が本来的にオフルマズドの創造物であり、オフルマズドが存在としてのよりどころであること、そして、その本来のあり方を忘れて悪業をなすものが悪人であることが示されています。さ

らに、最終章では、より明確にそのこと示されています。

最終章の第百一章では、オフルマズドが自ら、「この智慧において有れ。すなわち、牛は塵であり、馬は塵であり、金銀は塵であり、また、人々の身体も塵である。その唯一にして塵にまじわることのないこと、それは現象世界において正しいことを称賛し、有徳の仕事を行なうことである」と説示しています。すぐに思い浮かぶのが、如来蔵思想で説かれる客塵煩惱という言葉です。我々の仏性は外から偶発的に付着した煩惱によって汚染されていて、この塵を払拭することで仏性が顕現します。

まとめ

南都奈良は華嚴の教えが花開いた地でありました。その奈良・飛鳥地域に渡来人の足跡を偲ぶことができる猿石があります。胡人と呼ばれた渡来人の姿を表した石像に混じって、表と裏に顔が刻まれたものがあります。それはオフルマズドとアフリマンが相克する世界を表現したものと考えられます。ゾロアスター教の世界観を表した図像の中には善神と邪神が一体として描かれたものが多くみられます。この世界観は中央アジアやウテン国においても周知のものであったと推測できます。そのような背景の中、中国で深遠な教義を展開させることとなる華嚴経が成立したのであります。



猿石（表と裏）

奈良飛鳥資料館



ゾロアスター教の世界観

善神：オフルマズド（アフラ・マズダー）

邪神：アフリマン（アンラ・マイニユ）